

# 平成27年度 青少年問題調査研究会 第4回議事録

日 時：平成28年2月26日（金）14:00～16:30

場 所：中央合同庁舎第8号館6階623会議室

テーマ：社会貢献活動に取り組む若者のためのリーダーシップ論

講師：NPO法人コミュニティ・オーガナイズング・ジャパン代表

鎌田 華乃子 氏

パネラー：

おうめ若者カフェ代表 川崎 茜 氏

YEC（若者エンパワメント委員会）前代表 水島 滉大 氏

内閣府政策統括官（共生社会政策担当）付青少年企画担当

○司会 ただいまから平成27年度第4回「青少年問題調査研究会」で、今回は社会貢献活動に取り組む若者のためのリーダーシップ論ということで、開催させていただきます。

本日は、大勢の皆さんに御出席いただきまして、ありがとうございます。

まちづくりであるとか、地域おこし、あるいは困難に直面した方への支援、地域社会の課題解決などに取り組むNPOの方、民間団体、ボランティア、社会的企業、行政の方々などにとって、活動の輪をいかに広めるかということは、大きな課題、悩みだと拝察します。

今回の研究会では、そうしたお悩みを解決するヒントの1つとして、コミュニティー・オーガナイズイングの手法を活用した、リーダーシップ論ということをテーマとさせていただきます。最初に講演として、コミュニティー・オーガナイズイングを通じたリーダーシップと題して、NPO法人コミュニティー・オーガナイズイング・ジャパン代表の鎌田香乃子様から、お話を拝聴します。

鎌田様は、次代を創る100人のお一人として、雑誌『日経ビジネス12月号』でも紹介され、団体の取り組みについては、一昨年1月に、NHKの『クローズアップ現代』でも放映されました。

鎌田様による御講演の後、10分程度の休憩をはさみまして、パネルディスカッションにより、鎌田様にコーディネーターをお願いして、パネラーとして、おうめ若者カフェ代表の川崎茜様、YEC（若者エンパワメント委員会）の前代表の水島滉大様から、それぞれの取り組みについて、お話を伺いたいと思います。

なお、川崎様の所属の団体は、今年度の住友生命ヤング・ジャパン・アクション奨励賞を受賞され、水島さんの団体については、一昨年、内閣府社会貢献青少年表彰を受賞され、かつお二人とも、昨年度、内閣府で主催させていただきました、青年リーダー研修会において、コミュニティー・オーガナイズイングを勉強された方々でございます。

追って、パネルディスカッションが終わりましたら、本日は、座席について、こういった小グループ形式で、編成をさせていただいておりますけれども、できましたら、班ごとに自己紹介などをしていただいて、講師の方のお話を題材にして、各班で参加者御自身の活動経験を踏まえて、グループで意見交換できる時間を15分ぐらいとればよいと考えています。

その後、交わされた意見について、班ごとにどなたか御披露、会場全体で共有をさせていただきたいと思いますので、質疑応答という運びで、講師の方と会場全体という運びで、やらせていただきたいと思いますので、どうぞよろしくお願いします。

それでは、早速ではございますが、鎌田様に御講演をお願いしたいと思います。よろしくお願いします。

○鎌田氏 皆様、こんにちは。鎌田華乃子と申します。NPO法人コミュニティ・オーガナイズング・ジャパンの代表を務めております。よろしくお願いいたします。

また、このような機会をいただきまして、本当にありがとうございます。

今日は、1時間ほど私から、コミュニティ・オーガナイズングというところについて、話を進めていければと思います。

まず1時間、コミュニティ・オーガナイズングとは何かというところをお話したいと思うのですが、先ほど小山さんからお話がありました、青年リーダー研修会というのは、この前、ちょうど1月に終わったばかりでございまして、今回は、去年、1期生として参加してくださったお二人なのですけれども、今年は2期生ということで、2回目をこの前、実施しました。コミュニティ・オーガナイズングでは、5つのリーダーシップの要素を学んでいただくのですけれども、そのうちの1つである、物語を語る、ストーリーを語るというところに、フォーカスをした研修会というものをやらせていただきました。こんな形で総勢45名ほどの方たちが集まられて、グループワーク中心で、あとは、個人で発表するという形で、研修をさせていただきました。非常に盛り上がった研修会でして、すごく個人のつながりも強くなりましたし、なぜこういった活動をやっているのかというところも、腑に落ちるといっていただいで、よかったと思っております。

せっかくこういうふうにグループになっておりますので、皆さんにペアで、お話していただきたいと思うのですけれども、私は、今日、なぜ皆さんがいらっしゃったのかを知りたいと思いますので、グループ全体というよりは、ペアや奇数の3人とかでやっていただいて、お隣同士、なるべく知らない人同士で、2分ほど、なぜ今日はいらしたのか、どんなことを知りたいと思って、今日来たのかというところを、お話していただけないかと思えます。大丈夫でしょうか。今、ペアの方と顔を合わせていただいでいいですか。奇数になっているところは、3人とかで、やっていただければと思うのですけれども、よろしいでしょうか。

それでは、2分ほどはかりますので、なぜ今日来たのか、どんなことを知りたいと思って来たのかをお話してください。

(自己紹介、今日来た理由について話し合い)

そろそろ2分経ちましたので、ありがとうございました。

それでは、もう一度注目をいただいでいいでしょうか。何名かの方に、ぜひ今日、なぜ来たのかというところを、シェアしていただければと思うのですが、言っているという方はいらっしゃいますか。

○発表者1 札幌から参りました。本日はよろしくお願いいたします。本日は、ほかにも2名一緒に来ているのですが、広く一般の方、御高齢の方から下は赤ちゃんまで、いろいろな方が使っていただける施設で働いております。そういったところで、その方々が世代間交流ということで、コミットをして、何かしら活動が新しくできないかというのを学びに

まいりましたので、本日は、いっぱい勉強をして、北海道に持って帰ろうと思っております。よろしく願いいたします。

○鎌田氏 ありがとうございます。世代間交流ということで、幅広い世代の方とつながりをつくっていききたいというところで、御関心があるということでした。川崎さんの活動とすごく近いですね。ありがとうございます。

ほかにいかがでしょうか。お願いします。

○発表者 雑誌の編集をしている者です。よろしくお願いします。今日、こちらに来たのは、新しいコミュニティーをどういうふうにつくっていくか、そういうことに興味を持ってまいりました。もう一点は、私は地元で、学校支援地域本部とか、コミュニティースクールの学校運営協議会の会長をやれということで、2年ぐらい前からやってみて、地域をどういうふうにつながりをつくっていくかということに、興味を持ってまいりました。よろしく願いいたします。

ありがとうございます。新しいコミュニティーと地域でつながりをつくっていくことで、ありがとうございます。

○鎌田氏 もう一人、いかがでしょうか。男性の方が2人続いたので、できたら女性の方でいかがですか。ぜひお願いします。

○発表者 新潟県から来ました。市民会の事務局と子供会の事務局、私自身の地元で、里山再生プロジェクトの塾などをしております。若者が地元に住んで、メリットを感じるように、若者が楽しいと感じる場をつくっていただけたらと思って、今回、参加いたしました。よろしく願いいたします)。

○鎌田氏○ ありがとうございます。若者の人たちに楽しいと感じる場は大切です。それがあってこそ、地域が盛り上がっていくと思うので、ありがとうございます。

皆さんの御関心を伺えて、何となく私たちも話しやすくなったと思います。こういう形で、少し双方向でやっていければと思いますので、途中でよく分からない用語とかありましたら、分からないとか言っていただければと思ひまして、何せコミュニティー・オーガナジングという考え方が、アメリカで生まれた考え方なので、片仮名が多いのです。なので、分からないところがありましたら、言っていただければと思います。

今日のテーマが、リーダーシップということで、設定をしていただいております、例えばリーダーシップを発揮するというのは、どんなことをしている感じだと思ひますか。それは皆さん、お一人お一人、これまでの人生の経験の中で、私はリーダーシップを発揮しているとか、あの方はリーダーシップを発揮しているなど、一人一人違うと思うのですけれども、皆さんが、あの方がリーダーシップを発揮している、自分が発揮しているとも思うときはどんなときですか。当ててしまっていていいですか。リーダーシップを発揮していると思うときです。

○発表者 リーダーシップを発揮しているときは、私は和歌山から来させていただきましたけれども、東京なり来させてもらって、勉強して、それを地元を持って帰って、最先端

はこうだというような、リーダーではなく、ひょっとするとティーチャーの方だと思うのですけれども、持って帰って指導させていただいているときだと思います。

○鎌田氏 知識とか、経験など、そういったことを与えていく、教えていくというときに、リーダーシップを発揮しているのではないか。ありがとうございます。

もう一方、どうでしょう。あまり目を合わせてくれなくなってきました。奥の方、後の方で、何かお話を伺えればいいのですが、そちらの左の机の方、どなたかお一方もしよかったですらお願いします。

○出席者 私は、静岡から来ました。パネラーの水島君と知り合いです。リーダーシップを発揮していると、仕事などでよく思うのは、自分でこれをやろうと決められる人が、リーダーシップがあると感じます。

(鎌田氏) やろうと決められる人、ありがとうございます。

そういう形で、本当にお一人お一人、リーダーシップというものが違うと思うのです。なので、それはそれで、すごく大事なところだと思います。これからお話させていただくのは、1つのリーダーシップの考え方になりますので、これが正解、これはこれしかないと言っているわけではなくて、コミュニティー・オーガナイズングという文脈の中では、こういうふうなリーダーシップを捉えていますということで、それは皆さんの経験と符合するところとしないところとあると思いますので、そういった疑問とか、質問がありましたら、ぜひいただければと思います。ありがとうございます。

コミュニティー・オーガナイズングという言葉、この講演の前に知っていた方は、何人位いらっしゃいますか。手を挙げてください。ありがとうございます。もう大体知らないというのが、ほとんどです。私たちコミュニティー・オーガナイズング・ジャパンというの、2014年から正式に活動を開始しまして、それまではコミュニティー・オーガナイズングというものは、日本で伝えられていなかったですし、何もなかった状態です。まだ使われ始めて、2年ほどの言葉でございます。

何をしているものかという、もともとはアメリカで生まれたものなのですが、アメリカは民主主義を標榜している国であると思います。ただ、政治の世界は、今でもそうですけれども、例えば100年前のアメリカなどは、もっと白人男性がほとんどを占めている状態でした。ただ、アメリカには黒人もいるし、私たちのアジア人系の移民がたくさんいましたし、女性もいる、労働者もいる、そうした人たちの声は、全然政治に反映されないということで、民主主義を強くするという意味で、コミュニティー・オーガナイズングというものが生まれて、いわゆるマイノリティーの人たちに、コミュニティーをつくって、そこに政治的な、社会的な力を持たせていく声を束になって上げていって、反映させていくということで、生まれたのがコミュニティー・オーガナイズングです。

生まれたのは、100年以上前のアメリカです。NPO法人をいろいろ見ていきますと、コミュニティー・オーガナイズングということを知っている団体はたくさんありますし、取り入れている団体は、すごくあります。今、アメリカだけではなくて、ヨーロッパとか、中南

米、アジアなどにも広がっている手法でございます。

私の自己紹介も兼ねまして、なぜ私が、コミュニティ・オーガナイズングというものをやっているのかということをお話させていただきたいと思います。

私は、横浜で生まれ育ちました。専業主婦の母と会社員の父に育てられたのですけれども、仙台に1歳から6歳まで住んでいたのです。私は5歳のときに、母の様子がおかしくなってきました。話しかけても話しかけないでと言われたりとか、そんな状態が続いたのです。何かと思ったら、彼女はうつ病になってしまっていたのです。育児と家事の負担が、転勤の地でかかってしまったのと、骨折をしてしまって、動けない体に全てを担っていたところから、そういうふうな病気になってしまいました。

ただ、何とか横浜に戻ってきたのですけれども、戻ってきても病状がよくなって、学校から帰ってきて話しかけても、今は話しかけないでと言われるようなことが続いて、家では、私は一番上のポジションだったので、頑張っ振る舞っていたのですけれども、子供らしく、自分らしくなれる場所がすごく欲しかったのです。それが1つあったのが、近所の公園でした。そこには、木がたくさんあって、木登りできる木があったので、そこに毎日登っては秘密基地をつくったりとか、漫画を読んだりとかをしていたのです。

私が小学校2年のときに、その公園に工事が入ってしまいまして、たくさんあった木は、全部切られてしまって、私が大好きだった木も切られてしまったのです。そのときに何で日頃使っている子供たちの声を聞かないで、勝手にこういうことをしてしまうのだろうという思いの怒りと、心と体が半分持っていかれてしまったような気がしました。なぜだろうという疑問が消えなかったのです。

その後、成長していくにつれて、小学校5年生ぐらいのときに、環境問題というのが、世界中に起きていて、父が環境の仕事をしていたので、ダムの工事だとか、いろんなことで、生活の場が奪われている人たちがいることを知って、将来は環境の仕事がしたいと思うようになりました。念願が叶って、26歳で環境コンサルタントという仕事に就いたのです。すごくうれしくて、日々仕事を頑張っていたのですけれども、だんだん数年働いてきて、いろいろ分かってきたことがあります。

そういうのは、企業に幾ら環境を良くしましよと提案しても、企業のミッションはやはり利益を上げて、従業員を雇うことなので、環境問題に積極的に取り組むわけではないのだと気づいてきたのです。どうしたら私たちが日頃抱えている環境とか、社会の問題が解決するのだろうとなったときに、この仕事を続けていいのだろうかということを経験しました。

それは30歳ぐらいなののですけれども、そんなときに、欧米の方では、NPOとか、市民が提案した政策が通るということがあったのです。ヨーロッパやアメリカで通ったりなどを見ていて、日本は余りそういうことはないと思ったのです。日本でなぜないのだろうと思ったときに、市民セクター、NPOセクターは、余り尊重されていなかったり、人との距離があったりするというを知って、そこを強化すれば、何か日本でもっといい国になるので

はないか、一人一人の声が反映される国になるのではないかと思います、2011年からアメリカに留学しました。

留学先で、いろいろ市民参加について、どうやって学べるのだろう、どうやったら広げられるのだろうと苦しんでいたときに、出会ったのがこのカーネル・サンダースのようなおじさんなのですけれども、マーシャル・ガンツという方です。この人自身は、後ほど、キング牧師が、公民権運動で最高潮に盛り上がったときには、大学3年生でした。ハーバード大学の3年生だったのですけれども、触発されて、大学を中退して、オーガナイザーになって、その後、公民権運動から入ったのですけれども、2年でそこを離れて、農場の労働者をオーガナイズするというのを全米で初めて成し遂げた団体で、オーガナイザーとして働きました。30年弱、そういった活動をした後に、自分がやってきたことをちゃんと深めて、研究し直すことで、もっとよりインパクトが起きるのではないかと考えて、50歳手前ぐらいに大学に戻って、大学3、4年生をやり直して、修士をやって、博士をやってという形で、60歳ぐらいから大学で教鞭をとられているという方です。

私自身は、コミュニティ・オーガナイズングというのは、アメリカのものだし、通用するのは、結構斜めに抱えて授業を受けていたのですけれども、だんだん学んでいくうちに、人がつながりをつくって、活動していく中で、リーダーシップを発揮して、社会変化を起こしていくというのは、すごく自然なことだし、こういう世界がもっと日本で広がれば、すごく楽しくなる、わくわくすると思って、これを日本に持って帰ってこれないかと考え始めました。2013年に帰国してから、準備期間を経て、2014年にこの団体が立ち上がったという形で、やっております。

このマーシャル・ガンツさんが、コミュニティ・オーガナイズングはリーダーシップだと言っております。リーダーシップを考える上で、3つの質問が大事ですということを言っているのですが、最近、アドラー心理学というのが、日本でも有名になってきていますけれども、そこでも言われているような、3つの重要な質問があるのです。これは1世紀の2,000年以上前のヒレルさんという、ユダヤ教の学者さんが提唱した質問なのですけれども、1つ目が、私が私のためにあるのでなければ、私は誰なのか。これは別に自己中心的に生きなさいと言っているわけではなくて、他者をリードしたければ、まず自分自身を理解してくださいということです。あなたの価値観は何ですか、あなたの資源は何ですか、あなたの限界、できないことが何ですかということをしかりと自分に問いかけようということが1つ目です。

2つ目が、私が私のためだけにあるのなら、私は何なのか。これもすごく哲学的な問いですけれども、どんなに人は1人で生きようと思っても、1人では生きられないのです。もう関係の中でしか、人間は生きられない。何か社会変化を起こしたいと思ったら、それも関係する人、一緒にやる人の能力にすごくよるわけです。なので、ほかの人とも、関係を良くつくって、ほかの人の能力を引き出すということがとても大事だということを問いかけています。

3つ目なのですがけれども、これはどこかで聞いたことがあります。今でなければいつなのか。何か聞いたことがありますね。

○出席者 林先生です。

○鎌田氏 そうです。「今でしょ」ということで、林先生がはやらせてくれた言葉で、なぜか一緒なのですがけれども、これは行動しなければ、リーダーシップというのは学べません。社会変化も起こせません。部屋で本を読んでいるだけでは、何も変わらない。行動しましょう、失敗してみましょ、そこから学んでいきましょうという問いかけです。この3つが、リーダーシップを考える上で、基本に置かれております。

コミュニティ・オーガナイズングにおけるリーダーシップというものを、もう一回ちゃんとまとめてみますと、先ほども決めることだとおっしゃってくださった方がいましたが、責任を引き受けることがまず大事ということを考えています。どんな責任を引きうけたいかという、他者が何かできるようにするというのを引き受ける。何かという、先ほどの見通しが立たない確かな状況の中で、共有した目的を達成できるようにするという事です。なので、皆さん自身が決めて、全部お膳立てして、こちらへ行くということをやるといよりは、みんなにどうすればいいと問題を共有して、みんなでゴールを見つけて、そこに向かっていけるように背中を押していく役割というのが、リーダーシップであると考えています。特にポジションだとか、地位が高くなければ発揮できないというわけではない、地位とか、そういったものにとらわれないと定義しております。

ここからコミュニティ・オーガナイズングとはという話で、具体的にもうちょっと話していきたいと思うのですが、皆さん、スイミーは知っていますか。スイミーのお話があると思うのです。こういった小さな魚たちが集まって、大きな魚を追い払ったというストーリーで、これがまさにコミュニティ・オーガナイズングの考えです。私たち一人一人の力は小さいのですが、それを1つの目的のために、あわせて使うことで、大きな力がつく、そして、大きな魚を追い払うことができるというものです。この目になっているスイミーは、仲間外れだったのです。最初は色が黒いので、1人で要は浮いていたのです。でも、その浮いていたスイミーが、仲間を見つけて、一緒に活動していくことで、つながりをつくって、自分が黒いという自分の個性を生かして、私がメインになるということで、さらに力を増すので、個性、一人一人の資源が大事ということも、コミュニティ・オーガナイズングのポイントです。

事例の方に入っていきたいと思います。すごく有名な古い事例になりますが、黒人の公民権運動の中に、コミュニティ・オーガナイズングがございました。キング牧師はすごく有名です。キング牧師も、オーガナイズングスクールというところに通って、学んでいたのです。コミュニティ・オーガナイズングはどうやってやるのだ。どうやって人のモチベーションを高めるのだとか、どうやって戦略をつくれるなどと学んでいたのです。なので、何もないところから生まれたわけではなくて、こういう教える団体が、そこで、学んだ人たちが、こうやって運動を起こしていきました。キング牧師だけではなく、たくさんのリ



リーダーが、ここからどうやっていくか、だから運動が大きくなったのです。1人だけではとてもできることではないと思います。

もう一つ、これも有名な例で、インドのガンジーです。これも多くの人が立ち上がって、イギリスに対して独立を求めていくということをやっていました。一般人だけではなくて、たくさんのリーダーが育って行って、市民が何万人も参加するような行進というところまでいきました。

若者という意味では、すごく取り入れられております。世界中でも取り入れられている分野でもあります。私自身も2013年に日本に帰ってくるまでは、1年間、高校生のオーガナイザーをやっておりました。高校生の社会面の教育の問題とか、治安の問題があったので、それを自分たちの力で解決できないかとか、自分たちの力だけではなくて、大人と協力して、解決できないかということ、自ら動いて、やっていくようなことをオーガナイザーとして、やっておりました。

もう一つの事例としては、ニュージーランドで、原住民の若者たちがすごくうつ病とか、精神疾患で悩んでいる人たちが多くいます。なぜかという、自分ではできない、自己肯定感がすごく低いのです。それをコミュニティ・オーガナイズングに取り入れて、小さなプロジェクトでいいから、自分たちでやってみよう、それを実現していくことで、自己肯定感を高めようという取り組みが、ニュージーランドで行われていたりします。これは、政府の委託で、私たちの仲間がやっているという事例です。

学生さんはすごく変えやすいというか、特に日本の大学というのは、余り学生実地とかない感じですけども、海外の大学は、すごく学生実地とか、学生が何かアクションを起こして、大学を変えていくというのが、すごく盛んです。変えやすいです。大学を運営しているのは学生で、すごく大事な有権者というか、看護分野とか委託分野の事例なのですけれども、例えばコロラド大学の学生は、無料のクリニックをつくりたいということで、大学側を説得して、無料のクリニックの開設にこぎつけました。

新しい講座を開講したいと動いたのです。結局これは失敗してしまったのですけれども、珍しい講座をつくってくれということで、大学側に働きかけるということ、学生が動いて、やりました。その結果、学校は認めなかったのですけれども、自分たちで開講できる、先生も呼んで、生徒をつくって、そんなベースが、今、自分たちで学ぶということをやっているそうです。

新しい制服を作ってくれとか、そういうものを学生自らが動いていくということで、このコミュニティ・オーガナイズングが取り入れられて、世界中で動いています。こういう団体、特に医学分野で、コミュニティ・オーガナイズングを取り入れて変えていこうという学生団体を、私たちの仲間が提携したりしております。

ここで、2分ほど時間をとって、お話していただきたいと思うのですが、日本でコミュニティ・オーガナイズングが、こういうことがあったのではないかと、グループでお話していただけますでしょうか。過去の事例とか、今の事例とかを思い出してもらっ

て、これはコミュニティ・オーガナイズングなのではないか。みんなで力を合わせて、変化を起こした事例をお願いします。どうぞ。

(事例等について話し合い)。

それでは、2分経ちましたので、幾つかこういうものがあつたというのを、シェアしていただければと思うのですけれども、真ん中の後ろの班はいかがですか。最後の方まで、議論がされていたと思ったのですけれども、どうですか。

○出席者 なかなか思いつかなかつたのですけれども、3つほど、これは違うのではないかという話がありました。1つが、新潟県で原発を反対しようという町があつたが、地域から上がってきたのではないかとこのところを1つ挙げられました。あともう1点は、学校給食の件で、これは確かなことかどうかわからないのですけれども、学校給食は、親御さんたちが子供たちに、食事を提供しようというところから、始まつたのではないかという御意見がありました。3つ目は、障害者の施策について、障害者の団体、障害者の親御さん、そういった方の意見を取りまとめて、下からそのことを発表していきながら、作られたのではないかという、この3つの意見が出ました。

○鎌田氏 ありがとうございます。いずれもすごくおもしろい理由で、ありがとうございます。

もう一班どうですか。今のお話に加えて、何か結構違う話が出たというところはありませんか。下は向かないをお願いします。こちらの班は結構出ていましたか。

○出席者 成人式というのを、昭和21年ぐらいに、埼玉県私の地域の青年団の人たちが、戦後元気になるために、20歳の際いろんなことをやって励ます。これがあつという間に3年ぐらいに全国に広まって、成人式が各地で行われました)。

○鎌田氏 蕨市が発祥だったのですか。

○出席者 はい。

○鎌田氏 おもしろいです。ありがとうございます。

○出席者 ちなみに蕨市では、成人式と言わず、成年式と言います。

○鎌田氏 成年式ですね。やはり発祥の地だけあつて一味違います。

○出席者 自分たちの手づくりでやっているのです。その20歳になる子供たちが、プロジェクトチームをつくって、どういう会議を催していくかということです。よく世間では荒れる成人式とか、そういう話が来ますが、蕨では全く考えられないです)。

もっとお話を伺いたいものです。ありがとうございます。青年自らがまさにオーガナイズングしている感じです。

今、挙げていただいたように、コミュニティ・オーガナイズングというのは、言葉は新しいのですけれども、何か新しい考え方を言っているわけではないのです。昔から、人間は普通に力を合わせて、何か大きな社会変化を起こそうとか、課題を解決しようということをやっていたと思います。ただ、それを方法論としているだけなのです。

日本だと昔からある話で、一揆があります。一揆というのも、室町時代から中世の頃は、

すごく盛んだったと聞いています。その当時は、特に平和的な一揆もたくさんあって、みんなで話し合いに行くとか、みんなで農作業しないとか、とにかくみんなで一致団結をして、何かをするということを一揆と言っていただけで、みんなで鎌を持って、襲いに行くということを一揆ということではないそうなのです。だんだんそれが江戸時代に入って、一揆が禁止されてしまったりして、ちょっと暴力的になってしまったのですけれども、日本の歴史の中でも、市民の人たちがこういうふうに関力を合わせて、自分たちの正義とか、変化を起こしていくということ、活動で見られていたと思います。

最近ですと、コミュニティ・ソーシャルワーカーという言葉が生まれてきました。今までソーシャルワーカーというと、生活保護の受給者に手当をしたりとかがメインだったのですけれども、個別で支援していても、なかなか手が入らない。手が届かないところがいっぱいある、その中で、地域で貧困問題であるとか、教育問題に取り組んでいこうということのコミュニティを作って、やっぴいこうというコミュニティ・ソーシャルワーカーが注目されていて、これは女優の深田恭子さんなのですけれども、そのモデルとなった勝部麗子さんという方は、豊中でコミュニティー・ソーシャルワーカーの草分け的存在で活躍をしていらっしゃるって、去年、サイレントプアというドラマにもなったという方です。

私たちCOJでも、いろいろと実践の支援をしていまして、東北で実践の支援をしています。この佐藤美代子さんという方は、助産師さんなのですけれども、産後、お母さんたちがすごくしんどそうで、特に岩手、東北エリアは、まだまだ男尊女卑の考え方がすごく強くて、核家族になっているにもかかわらず、旦那さんが助けてくれないとか、家族からは、あなたが全部やらなければいけないというプレッシャーを感じている。その中で、お母さんたちが助け合って、まず自分たちの生きづらさとかを解消していこうという、取り組みをしていらっしゃる方が岩手にいます。

葛巻徹さんという方は、まちづくりを市民主導でするために、花巻で頑張っている方なのですが、花巻もすごく市民参加が進んでいないところだそうで、何かしようと言っても、全然の呼びかけが来ない。なので、子供たちの教育の現場、子供たちがまちづくりを疑似体験できるような現場を自分たちの力でつくって、それをきっかけに市民参加を増やしていこうという、プロジェクトをやっていらっしゃる方がいます。

先ほどLGBT成人式の話をしよとして、成年式の話が出て、すごくいいタイミングだと思ったのですけれども、埼玉で、LGBT性的マイノリティーの方たちのための成人式を、この前、初めて開催されました。なので、すごく今、蕨市のお話を聞いて良かったと思ったのですけれども、LGBTの方たちは、要は男は袴、スーツ、女性は着物と決められているもののイベントに行くのが、すごくつらいそうなのです。自分の性とのギャップを感じてしまう。なので、成人式の日に行かないで、家の中にずっといるという日々を過ごしている人はすごく多いそうです。それをなくすために今、全国でLGBTのための成人式は広がっているのですが、埼玉バージョンというものを、この前、やられた方が、私たちのワークショップの卒業生でいらっしゃいます。

あとは、私がやっている女性のエンパワメント、その女性が母親とか、妻とか、そういった役割にとらわれずに、自分らしく生きていいのではないかと声を声に出していく。ひいては政策とかも変えていきたいということで、ちゃぶ台返し女子アクションということ私をやったりしております。平和的なちゃぶ台返しでございまして、段ボールのちゃぶ台を返しながらか、今、自分で我慢していることとか、世の中はこうなったらいいということ叫んでいって、ことしの4月以降は、もっと具体的な変化を起こすキャンペーンをやっていく予定です。

ここで皆さんにお話いただきたいと思うのですけれども、皆さんが今までの話を聞いて、皆様の活動にコミュニティ・オーガナイズが役立ってそうですかということ、ペアでお話いただければと思います。先ほどグループになりましたけれども、ペアの方が、濃い話ができると思いますので、先ほどの自己紹介、なぜ来たのですかという話をしたペアで構いませんので、2分ぐらい時間をとっていただいて、皆さんの活動に、コミュニティ・オーガナイズが役立ちそうですか、どういうふうに役立ちそうですか、役立たなければ役立たないでもいいです。ちょっと話をさせていただければと思います。

それではどうぞ。ペアでお願いします。

(コミュニティ・オーガナイズについて話をします)。

そろそろ2分経ちました。どうでしょうか。幾つか皆さん、こんなふうに役立ちそうみたいところを、まだ分からないところが結構あると思うのですけれども、今の感覚でいいですので、共有していただけないでしょうか。

それでは、目があつたので、最初にお話いただきましたけれども、お願いします。

○出席者 座りながら説明させてもらいます。まず私は若者支援施設というところに在籍してまして、若者の居場所づくりということで、世代間交流もそうなのですが、中高生だったり、大学生という若者が、そこを居場所と思ってもらって、なおかつ自分たちの力だけではなく、私たちのような財団と関わることで、イベントの企画だったり、ボランティアの参加だったりという、自分たちの枠を超えた自主的な活動ができる場というのを広げていく。いろんなところで、自主的な活動につながっていくのがコミュニティ・オーガナイズではないのかというのが、話として挙がりました。

○鎌田氏 ありがとうございます。

お隣の方、どうぞ。

○出席者 私自身、まだまだフードパーク活動という活動に対する認知度ですとか、社会からの共感や賛同というものが、得られていない状況だと認識しておりますので、そういったところで社会からの共感や参加してくれる方を増やしていくところで、役に立つのではないかと考えています)。

○鎌田氏 ありがとうございます。普段接する人たちの枠を超えとか、共感する人たちを増やしていく、さらに賛同者を増やしていくというところで、いいのではないかとお話をいただきまして、まさにそこをやっていないと、活動も広がらないですし、何か大きな

変化を起こすのにも、苦勞してしまうところだと思います。ありがとうございました。

実際にコミュニティ・オーガナイズングというものを学んでいけるものだというので、考えておりますので、どうやって学んでいくのだというところを、聞きたいと思います。先ほどリーダーシップの定義ということをお話しました。確かな状況の中で、他者が共有した目的を達成できるように、そういった責任を引き受けてくださいということ。それは皆さんお一人お一人、関わることを決めたリーダーの人たちが、そういった覚悟を決めて欲しいという定義となっております。

ただ、不確かな状況の中で、動いていくというのは、すごく怖いのだと思います。私自身も別に不確かな状況の中で動きたいと余り思いませんし、答えが分かっている、こうすればうまくいくと思ってやっていたら、どんどん動けます。そのときに、どんな難しさがあるのかというと、1つは戦略、こうやったら課題は解決するという戦略がとても大事になると思います。ただ、戦略だけでは、人はついてこないのではないか。すばらしいプランがあって、これをやれば貧困をなくせますとか、青少年の動きがもっと活発になりますとかは、分かっているけどみんな来ないです。なぜかということ、やはり心のところが大事なので、つまり共感とありましたけれども、心が動いて、今、やらなければいけないとなって、初めて人は行動に移っていく。なので、頭と心というのがすごく大事になってきますので、心の中で、ときにそれをうまくやる手とやっていますけれども、そのスキルが大事になってくるのではないかと。この3つ、頭と心と手をしっかり鍛えていくというところを大事にしております。

コミュニティ・オーガナイズングを皆さん自身が、現場に戻って始めていくときに、どんなことを心掛けて欲しいかということ、大きく3つの質問を大事にします。

1つ目が、同志は誰かということです。同志は日本語ですと仲間というイメージになると思うのですが、このコミュニティ・オーガナイズングでは、価値観をともにできる人たちと考えています。価値観をともにできて、しかも一緒に動いてくれる人たち、何かあったら手伝うみたいな感じではなくて、そこは大事だから、一緒にやっ払いこう、私もチームの一員に加えてくださいというぐらいに、主体的になってくれる人たちのことを考えています。もっと分かりやすく言うと、問題を抱える当事者であることがとても大事だと思います。支援者というよりは、問題に直面していて、例えば若者支援をしている人は、若者自信を同志と考えていただいています。

次に考えて欲しい2つ目が、同志が直面している問題は何か。同志、当事者が大事ですと言いました。例えば若者では、皆さんが思う若者の問題にはなくて、若者自身を感じている問題は何か。例えばよくあるのが、大人から見て、若者の問題というのは、こういった問題があると言いつつも、若者に聞いてみないと、給食がおいしくないとか、クラブ活動がつまらないなど、すごく自分の毎日の生活に紐づいた問題を感じていると思うのです。なので、皆さんが見て、問題だと思うことをやらせるのではなくて、若者自身は、何を問題と感じているのかということをしつかりと引き出していく。たくさんの若者から意

見をもらって、それを明確にしていくことがとても大事なことです。その問題に対して、若者自身、同志の資源をどう使っていくかですけれども、困難に立ち向かい、パワーに変えていくかということです。誰か偉い人とか、専門知識のある人たちに頼んで、あの人たちがやってくれるのではなくて、私たち、若者自身が、自分で持っている資源を使って、どうやってこの問題を解決できるか。例えば学校の授業がつまらないという問題があったときに、誰か先生が変えてくれるのを待つのではなくて、自分たちで学校の授業がつまらないのだということを訴えるような集会をしようとか、学校の先生と話す会話の場を持つとか、そういうことを自分たちで動いていくことで、先生も意識を変えてもらって、授業がおもしろくなるようにするとか、そういう自分たちで持っている資源をいかに使っていくかというのが、コミュニティ・オーガナイズングでポイントになっていきます。

コミュニティ・オーガナイズングで、リーダーシップを5つの要素に分解して、学ぶようにしております。この5つの要素がありますが、1つ目がストーリーの共有ということでリーダー研修会で学んでいただいたところになります。パブリック・ナラティブと呼んでいるのですが、公の場で話す物語ということで、パブリック・ナラティブで、まさに共感と呼んで、今、一緒に動いていこうと呼びかける物語、ストーリーの話し方を学ぶものです。

2つ目は、関係に基づいたコミットメントとちょっと分かりにくいのですが、幾らバイト代あげるからやってということではなくて、自主的に、主体的にやって欲しい。そのためには、皆さんとの関係であったりとか、若者同士の関係をしっかり作っていくこと、一緒にやるから、同じ思いをともにする仲間たちと何かができるかもしれないという、強い人間関係を作っていくのがとても大事になります。それをどうやっていくのかというのが2つ目です。

3つ目が、明確な組織の構造です。よくボランティアの組織では、明確な組織の構造で、すごく維持しにくい。硬くなってしまって、入りにくい組織になってしまうので、余り作らなかつたりするのですけれども、うまくいっている組織は、ちゃんと明確な組織の構造があって、役割があります。それをボランティアの組織がどう作っていけばいいのかというのを、3つ目にやっていきます。

4つ目が、先ほども言っていた若者の資源を、当事者の資源をどう使って、自分たちで起こしたり、変化を起こせるのかという戦略を抱えてきます。自分たちの思っている資源を使って、変化を起こすことで、自分たちが変化を起こしたと思えるわけです。自分たちの資源を使って、自分たちが動いたから変わったというと、すごくエンパワメントというか、力があるのだといえます。そういった戦略をどう作っていくかというのが、4つ目です。

5つ目は、それを測定できて、目標のあるところに落とし込んで、しっかりと実施していきましょうというものになっています。

どんな組織をつかっていきたいかということ、こういう私がリーダーということで、1人

の人がすごく背負って、責任感が強くて、私がやらなければという組織だと、なかなか長続きはしない。この人がいなくなったときに、組織はなくなってしまふ。

そういったドットリーダーの組織運営をしているわけではなく、みんながすごく能力があって、やる気がないとみんな違う方向を見ている。私がリーダーみたいな感じで、見てしまっている、そういったリーダーシップではないかと思います。

目指したいのは、スノーフレック・リーダーシップということで、お互いがお互いの存在が必要で、相互間のリーダーシップと言っていますけれども、そういう状態を作っていく。この図のみそなのですけれども、最初は、1人の人が始めると思うのです。どんな運動でも、決意を固めて動く人というのは、最初は多くありません。でも、この1人の人は、この4人の仲間を集めて、4人をリーダーになるように一生懸命育てていくわけです。育っていったときに、今度はこの人たちがリーダーになって、自分たちのチームをつくっていけばいい。そういうふうに、この人に全部活動を寄るのではなくて、この人たちがリーダーになって、自分たちでチームを作っていく。ひいてはこの人たちが軸になって、チームを作っていく。こういうふうに広がっていく、リーダーシップを作っていくことで、活動は広く、大きくなっていきます。

駆け足できたのですけれども、最後に実際にパブリック・ナラティブの事例を見ていただきたいと思います。映像になってしまっているのですけれども、字幕がついていますので、その字幕を見ていただければと思うのですが、このお話の背景というのは、ハーバード大学でパブリック・ナラティブというのを教えられております。最終課題として、5分間のナラティブを話してくださいというものがあるのですが、ちょうどこのナラティブを話すジェームスさんという男性なのですけれども、イギリス人の男性で学生なのですが、彼はゲイなのです。ちょうどスピーチをする直前に、性的マイノリティー、LGBTの子供たちがたくさん自殺をしてしまうという時期がありました。それを受けて、何か行動したいと思って、このパブリック・ナラティブを話しています。ちょっと見ていただければと思います。

(動画が流れる)。

今、パブリック・ナラティブという、ストーリーを語るころの事例を見ていただきましたが、今日は、時間の関係で、詳しくお話できないのですけれども、ストーリー・オブ・セルフという、私自身のことを話すということと、アスという私たちのことを話す、ナウという今、やっていきましょうという、最初のヒレルさんの言葉で、私、私たち、今という話だったと思うのですけれども、それに紐づいているストーリーなのですが、誰でも自分の人生の中での経験だったりとか、あとは、皆さんの経験とかをきちっと語ることで、共感と呼べるストーリーが作れるものがございます。それを研修で教えているという形です。

私たちは、このコミュニティ・オーガナイズングというものを、2日間のワークショップで教えております。あとは、パブリック・ナラティブという、ストーリーを立てるとこ

ろだけを1日のワークショップで教えています。講義もあるのですが、ほとんどは実習というか、演習をしていただくという形式でやっております。このワークショップというのは、基礎を学ぶだけという形なので、この後に、実際にプロジェクトをやる中で、いろんな困難があったということで、コーチングとか、アドバイスということをやっているという授業をしております。もし興味がありましたら、こういったワークショップのガイドが全て汲みとられている中身のホームページを公開しております。これを自主的な勉強会に出しても全く問題がございませんので、みんなで読んでみようとか、ちょっとやってみようとか、ガイドだけでは伝えられる範囲の限界があって、あれなのですけれども、皆さん自身の勉強会とかで、やっていただければと思います。さらにもっと学びたい方は、手帳とか、論文集も同じくウェブサイト公開しておりますので、使っていただければと思います。

ワークショップも全国で開催させていただいております、北は青森、南は九州まで開催しております。今まで、最低年齢の参加者は17歳ぐらいで、最高年齢は78歳の人で、すごく幅広い方たちが、ワークショップを受けていただいております。

最後になりますけれども、もうちょっとコミュニティ・オーガナイズは、どういうふう実践で使われているのかを知りたい方がいらっしゃいましたら、3月27日に東京になってしまうのですけれども、日本財団で、午後1時から、こういった実践事例を集めた発表会的な、祭りといっていますけれども、やっております。10人の実践をした人たちが、うまくいったこと、うまくいかなかったことを赤裸々にいろいろ話していただく機会になっております。ワークショップについては、来年度の開催予定は決まっていないのですけれども、随時、フェイスブックページ等で、シェアしていきますし、カスタマイズして、検証することもやっておりますので、そういったことも問い合わせいただければと思います。このホームページに、全て教材掲載しております。

ちょっと長くなりましたが、以上になります。どうもありがとうございました。(拍手)



○司会 どうもありがとうございました。

それでは、ここで10分程度、休憩したいと思います。

(休 憩)

## パネルディスカッション

○司会 それでは、皆様、再開をさせていただきたいと思います。

これよりパネルディスカッション形式で、開始をさせていただきたいと思っています。

以後、コーディネーターとして、鎌田様にお願いをしたいと思います。鎌田様、どうぞよろしくお願いいたします。

○鎌田氏 それでは、ここからはパネルディスカッションということで、まずお二方から発表をしていただいて、それで、議論の方に入っていきたいと思います。

まず川崎茜さんから取り組み、おうめ若者カフェというところをお話していただければと思います。お願いします。

○川崎氏 パワーポイントの資料が配られているので、ぜひこちらをご覧ください。

私は、おうめ若者カフェの代表を務めています、川崎茜と申します。

このような機会をいただき、すごくときどきしながら、何を話そうかと思いながら来たのですけれども、参加する理由を聞いて、私はここに来てよかったのだと、心が安心しているところです。

私は1990年青梅市に生まれ育ち、25年が経ちました。大学3年生の頃に、2カ月ある休みを旅して遊んでいたのです。こんな田舎は出て行ってやろうと思っていたのですけれども、オーストラリアから帰ってきて、マレーシアに行くまでの1週間の中に、高校の友達が脳腫瘍で倒れたと連絡が来たのです。病院に行くと、彼は植物人間の状態でした。話すこともできなくて、最後に会ったのは高校生のときです。すごく怖くなったのを今でも覚えています。次に連絡が来たのは、亡くなったときでした。

人生とは、いつどうなるか分からないということと、また、今やりたいこと、やれることはやろうと決めました。そして、何より人と生きていること、その人の人生に関わっていられることが宝だと知り、私を知ってくれている、私が知っている人がいる、この地域で生きようと決めて、活動を続けています。

そんな私が代表を務めているおうめ若者カフェについて、今日は、お話をさせていただいたらと思っています。

おうめ若者カフェは、2011年度、市役所との協働事業から始まりました。市が青少年育成リーダーの研修会をしているのですけれども、そのOBの受け皿がないということで、若者層の団体を作って欲しいということでした。今年5年目なのですけれども、25年度から市との協働はなくなり、任意団体ということで、活動を続けているところです。

青梅市内外の若者を中心に、ネットワーク組織として作っているのが、若者カフェです。実際にカフェがあるのかと聞かれることがあるのですけれども、カフェはありません。ネットワークとしてあります。

私たちの目標としていることは、若者の力を町に、創造力や行動力、思いを行動に、やりたい気持ちを実現する、ここに住みたいと思える町にということで、結婚するときに、

ここに住みたいと思える憧れの町をつくろうと考えています。

2011年度から活動は続けているのですが、さまざまな活動をしているので、2015年度についてお話ししたいと思います。

私は3年目なのですがすけれども、おうめ若者カフェを辞めようと思っていたのです。あと1年で、もう辞めよう、こんな大変なことは辞めようと思っていたのですがすけれども、青年リーダーの合宿で、なぜ私はやっているのだろうということを考えたときに、先ほど冒頭でお話をした、このことで、自分は青梅で生きていきたいと決めたのだということ、心から青梅が好きだと思えたのです。そして、各地域で頑張っている青年層を見て、私も頑張らなければいけないと思い、今年1年で代表は降りるのですけれども、次につなげていくという、次世代を育成する年にしよう決めました。

そこで出したのが、言い訳する前にまず行動、若者カフェを広めるのは若者だということです。マンネリ化していることや、私自身、今年度で代表を変わろうと決めて、その前にたくさん失敗をしようと考えました。

そしてやったのが、月1イベントFAAVO市長選選挙の投票率アップ活動です。月1イベントというのは、起業したい若者が日本酒バーや絵本カフェに挑戦したり、青梅の観光資源であるラフティングやバーベキューなど、さまざまなことをしてきました。今までは机に座って、青梅って、こうだね、ああだねと話していたのですがすけれども、文化交流することで、たくさんの気付きがあるのです。青梅って、こんなところがあったのか、川を下ってみると、橋の下はこう見えているのかとか、自然が豊かなのは、青梅の財産だということに若者が気付きました。

また、FAAVOというのは、地域クラウドファンディングなのですがすけれども、私たちの運営資金を集めるのに、35万円という目標金額を掲げてやりました。

思いを言語化できていなかったもので、若者たちが何でやっているのだろうか、分からないという20歳の子たちがいるのです。でも、私たちは、青梅でこんなふうにやりたいと思っているのですと伝えることができたときに、うれしいと、心が揺らぎました。そういうことは、高校生の文化祭のときにはいっぱいあるけれども、大人になっていくと、どんどんなくなります。そういう心を動かすということが、おうめ若者カフェにはたくさんあります。

また、市長選選挙で、各立候補予定者の方に、若者ならではの視点で質問をして、3者の比較をフェイスブック上にアップしました。好きな映画は何ですか、毎日やっていることは何ですかと、出すのです。そうすると、市政に関わらない、政策ではないところで人柄が見えて、若者たちの投票率を上げたいと思っていました。どうなったか、若者層がどのくらい上がったのは、まだ見ていないのですがすけれども、そういうことをまた今年も続けてやっていきたいと思っています。

いろんな活動がありますが、特におうめ若者カフェが2013年度から年に1回ずつ開催している、ミスコンならぬババコンというものを御紹介したいと思います。ミスコンならぬ

ババコン開催、ファッションで若者と高齢者の縁づくり。

動画を御覧ください。

(動画が流れる)。

これがババコンです。ババコンは、青梅のオーバー70のおじいちゃん、おばあちゃんを若者がコーディネートします。普段出会わない両者がファッションショーでつながりブレイク。全てを委ねるモデルさん、きれいになって楽しんでと願う若者とのコラボが感動を生みます。

それに向けて、何回かミーティングをしたり、あとは、買い物に出かけたりします。

そして、若者カフェがとにかく若者にこだわっているところなのですが、スマイルトレーナーという若い世代が出てきたときに、その人にスマイルトレーニングをしてもらいたい、あとは、ヨガをしているとか、歩き方を教える人とか、ヘアスタイリストの方も全員若者を使っています。お願いしますということで、スマイルトレーニングをやるのですけれども、1回目、2回目、3回目と若者が学ぶのです。こう伝えればいいのかとか、また、これだけ需要があるのだったら、自分たちで講座を開いてみようということで、自分たちで開くということもしています。

ババコンの最大の魅力は、若者と70歳以上の方のコラボレーションです。孫でもないのに若者にコーディネートを委ね、そして、ファッションショーとして舞台の上に立ちます。スタイリストの若者は、これを全力で支えます。

私は出られないという人がいるのです。前日になって断られることも、1回だけありました。ですが、そのときに、私たちと一緒に出ましようと言って出たり、おじいちゃん、おばあちゃんたちはすごい力なのですけれども、腕を組んで出ること、支え合う信頼関係があります。

この経験を通じて、若者は孫になって欲しいと言われてしまった、ババコンと一緒にやってしまったら、もう無視ができない、ただのおじいちゃん、おばあちゃんではなくて、無視したくない存在に変わったと、こういうふうに町の人とつながっていきます。

今回のテーマは、街コンファッションということで、派手でもなく、地味でもない、でも、個性あふれるというところがテーマでした。

右側のおじいちゃんは、俺の女にならねえかと言っていました。そういうふうに、舞台上に上がることで、こういうアピールをしようと考えているのです。

この方は恥ずかしいということで、おうめ若者カフェのメンバーと腕を組んで出たり、あと、カメラを持って出た方は、自分しか見えないものを撮りたかったということで、モデルさんは、想像して、自分でできることをしていきます。

この方は、白血病で、一昨年のステージが終わってから入院して、髪の毛がぼっさり短くなった。でも、元気になって、また今年も出たいですということで、出場してもらったのですけれども、再発してしまって、今、入院しています。そんなことで、若者層が家族ではない人で心が揺らぐ。病院にお見舞いに行ったり、また、アルバムを作ったりして、

渡しに行ったりもしました。

この左側のおじいちゃんは、ダンスを踊ったのです。若者が出してきた曲に振りつけがあったので、ユーチューブで何回も見て、1人でずっと練習してきたのです。すごい達成感でした。目が輝いていました。

また、こちら側のおばあちゃんは、スタイリストをぐいぐい引っ張っていくタイプのおばあちゃん、コーディネートも自分でしてしまったというタイプの方もいらっしゃいます。

各賞をつけていまして、一人一人に「〇〇で賞」という賞を送っています。その審査員も若者です。スタイリストだったり、ウォーキングを教えてくれた方、あとは、広報活動をしている若者層にお願いをしています。

その間に、会場の方にインタビューをしたり、出演者の方にどうでしたかという感想を聞いたりもします。

そして、各賞の発表をします。

みんながとても素敵な笑顔でいるのですけれども、ただ楽しい、ただ人を集めるイベントをすればいい訳ではないと、私たちは考えています。何万人呼んだ、何千人呼んだ、それはすごいと思います。でも、そういうイベントを私たちがする意味はないと考えています。

それでは、なぜやっているのか。それは、イベントをやることで、いろんな人が、自分らしく輝くまちづくりができると思っています。それはチラシ作りから始まりますが、このステージは、ビール箱を下に置いてあるのです。その上にベニア板を敷いて、マットを敷いています。見えないのですけれども、後ろに180センチぐらいのベニアで造った壁があったり、あと、おうめ若者100人ステージというのですけれども、その看板を作ってもらったり、そういうものは、土建屋さんをお願いをして、夜な夜なみんなでペンキを塗ったりして作ります。

また、ファッションショーでスタイリストをする方々は、直接人と交流がしたいということで、町に関わる。広報、チラシ作りは、1人でパソコンに向かって、それを入稿して、配るのはみんなでやる。その人らしさで輝く場所があると、私は思っています。

準備などから考えると、とてもエネルギーを使って、体も疲れます。なぜやるのか。おうめ若者カフェが考えている、3つのことがあります。

1つ目、人と出会える。最近の若者はとよく言われるのですけれども、携帯が離せなくて、心のよりどころがフェイスブックとか、SNS上でしかない。そんな若者だからこそ、人肌を感じたときにすごく動きます。びっくりするほど動きます。人が人を動かす、人と出会うことをおうめ若者カフェは続けたいと思います。特に若者層で会うことは簡単なのですけれども、異年齢で出会うということは、難しいです。あと、意味がないと、若者層は思ってしまうのです。でも、出会ってからの深さは、最近の若者だからこそ、強いと感じています。

また、達成感があります。自分たちにできるスモールゴールを設定しています。ちょっと悩んだとき、つまずいたときに、支えは心が満たされます。ここで支えてくれたという仲間がいることが特徴的です。また、違いを楽しむ、人と違うからこそ、自分のいいところも、苦手なところも知ることができます。そのことで、自分はここができるという達成感につながると思っています。

また、先ほどもおっしゃっていましたが、失敗しても平気だ。失敗は挑戦をくれると信じて行動しています。イベントをやると、失敗してしまったとか、いらいらしている若者たちがいるのですけれども、今、何ができるのか、そんなときだから、今、何ができるのかとって話をするのは。くよくよする前に行動しろ。そして、10褒めて、1こうした方がよかったと言うと、これだけ認められた、こういうふうになればよかったと思うので、これを実行委員は徹底してやっています。

そんなこんなで、おかげさまで、ババコンは、YOUNG JAPAN ACTIONの奨励賞を受賞したり、子供文化地域コーディネーターのイベントアワードで最優秀賞を受賞したり、また、先ほども見ましたという声がありましたが、『朝日新聞』の2015年11月26日のローカリストで、川崎茜が取り上げられました。

私が今日お伝えしたいことは、若者の力を信じて欲しいということです。若者で地域を見つけるということは、難しいのですけれども、私たちが集めたのは、学習会、イベント、広報での呼びかけでした。また、他地域と比べる、この町にできること、他地域の事例などを知って、自分たちが持ち帰ってやる。そして、やりたいということを支える、〇〇やってみたらと、大人から声をかけるのも、何々したいですという声を拾うのも、どちらでも、やりたいということを支えることができると思っています。

青梅でも、他団体の人が失敗するのは。本当に失敗するのは。地域の大人の方は、だから若者はとすごく怒っているのですけれども、そこは若者なので、すみません、失敗はするのです、でも、見捨てないでください、押し潰さないでくださいということ、よく地域の方と話をします。そして、そんな大人や社会を若者は求めています。失敗しても平気だ、支えてくれる、見守ってくれている大人たちや社会を若者は本当に求めています。

次世代を見つけたい、若者のIターン、Uターンイベントをしたいなど、何でも構いません。ババコンで異年齢交流のイベントをしたいというときには、ぜひ私を呼んでください。

すみません、駆け足になりましたが、おうめ若者カフェのプレゼンを終わります。御清聴ありがとうございました。（拍手）

○鎌田氏 ありがとうございます。ババコンの映像が衝撃的に楽しかったです。わくわくします。

それでは、続いて、水島さん、お願いします。

○水島氏 皆さん、こんにちは。ありがとうございます。水島滉大と申します。

私からは「学生団体から学んだ社会変化の導き方」ということで、お話をさせていただきたいと思っています。

今回は、私は誰で、なぜ活動しているのか、社会を変える戦略、社会の変化（まだ途中だけれど）ということで、お話をさせていただきたいと思っております。

まず私は誰で、なぜ活動しているのかということなのですからけれども、自己紹介をさせていただきます。

私は現役大学生で、大学の経営情報学部という学部に通う3年生です。

先輩から見た目的に社長とあだ名がつけられてしまって、それ以来、3年間ずっと呼び続けられてしまっているのですけれども、よかったら皆さんも社長と呼んでください。

やっていることは、いろいろリストアップしたのですけれども、YEC、若者エンパワメント委員会という、学生の団体なのですからけれども、大学を始め、周りの大学とか、高校のメンバーがいる団体なのですが、そこで、昨年度は、代表を務めさせていただいておりました。

今はYECから派生した、わかものまち・静岡という団体で、NPO法人の法人格を今年の7月ぐらいに取れる予定なのですからけれども、その副代表理事として、今、活動しております。

あとは、学生団体の中間支援をしているDDという団体ですとか、まちバル、静岡の中心市街地の活性化イベントとして、食べ物とか、お酒などで、食べ歩き、飲み歩きをするイベントのメンバーになっていたり、若者メディアというものを、今、作ろうとしていまして、「へんかしぞ〜か」という、チェンジという意味の変化と、私は変ですかみたいな意味を掛けているのですけれども、そんな団体を、今、やっています。

好きなことは、人と話すことと、グルメ、お酒は特に日本酒が好きで、静岡はとてもおいしい日本酒がたくさんあるので、静岡に来たときはぜひ飲んでみてください。若者らしくないことを言っているのですけれど。

今から話すのは、私が何で活動しているのかということなのですからけれども、私は2014年、2015年とそれぞれスウェーデンとドイツに行かせてもらう機会がありました。スウェーデンは団体で、ドイツは文科省の事業で、日独交流事業みたいなもので行かせていただきまして、そこから私の原体験みたいなものを話させていただければと思っております。

問題意識というか、私が今すごく気になっていることは、これはベネッセが2013年に出したデータなのですからけれども、特に中学生、高校生の時間の過ごし方、時間を無駄に使っていると感じる人は、この数字は前年比なのですが、中学生だと63%、高校生だと68%ということで、3人に2人が時間を無駄に使っていると感じています。あとは、多忙感、忙しいと感じている子の割合は、高校生だと70%もいるということが、この調査で明らかになっています。なので、中学生、高校生、若者は、今、自分の人生とか、生き方に対して、忙しいとか、自分の思いどおりにいっていないと感じています。

これは、実際に私達の団体で、スウェーデンに行ったときに、街頭アンケートをしたものです。拙い英語で、一生懸命エクスキューズ・ミーと言って、ストックホルムのストックホルム駅というところで、街頭アンケートをしたのですけれども、社会は自分の力で変

えられると思いますかという質問がアンケートにあったのですが、その結果として、静岡の10代は、そう思う、どちらかといえばそう思うと答えた人は、37%でした。でも、ストックホルムの10代の子は、70%の人が、社会は自分の力で変えられると思うと言っています。

もう一つ、あなたは自分のことを価値のある人間だと思いますかという質問に対して、静岡の10代は48%だったのですけれども、ストックホルムの10代の子は82%が、自分のことを価値のある人間だと思うと考えています。

私はここでもやもやとしていたのです。理想は、自分は社会の一員で、社会に対してこうなって欲しいとか、こういう社会だったらいいのにといいことが言えたり、自分は社会をよくできる、まずはやってみようと思える状態だったらいいと思うのですけれども、実際は自分には何もできないとか、社会は誰かがつくるもので、その社会にどうやって適応していくかということが求められているのが現実だと、若者として、私も思っていたのですが、この理想と現実とのギャップに対して、違和感とか、疑問とか、寂しさを持っているというのが、私の思いだったのです。

そして、お二方も動画を流していたので、私も動画を流させてもらいたいのですけれども、ユーチューブでこれは見られるのですが、フラッシュモブin静岡という動画です。見ながらお話しします。

(動画が流れる)。

私がこれに出会った理由なのですけれども、YECという団体に入って、まだ活動もしていなかったときに、これは中高生がやり始めた企画なのですが、当日、交通整理に来てほしいということで、私が偶然この場に立ち会うことになったのです。フラッシュモブというのは、通行人がいきなり踊り出すという企画なのですけれども、これを高校生が企画して、当日の映像になります。

だんだん人が増えていっているのですけれども、ストーリーとしては、最初に泣いている女の子がいて、その子を慰めるために、音楽が流れ出して、みんなで踊って、慰めようということです。

○鎌田氏 社長はこの中のどこにいますか。

○水島氏 この手前ら辺で、道路許可、警察などの都合で、必ず道路を開けなければいけないということで、この辺にいます。この辺で一生懸命やっています。

また、この辺でどんどん人が増えていきます。もちろん仕掛け人です。勝手に入ってきて、踊れるというわけではないので、みんなで練習しているのですけれども、こういうふうにならなくて人が増えていきます。

今、青い服を着ている子がここに映っているのですけれども、高校1年生のこの男の子が、最初に1人で、みんなでフラッシュモブをやりたいと言い出したのです。それで、うちの団体に声をかけてくれて、私らの団体が、中高生のやりたいことを支援しているような活動をしていて、青いパーカーの子が来てくれて、そこからフラッシュモブというもの



を、半年ぐらいかけて準備をしたわけです。

まだ10人ぐらいなのですけれども、だんだん仕掛け人が増えていきます。今か今かと待っていた小学生が入ってきたりしました。

主婦の方々も、いろいろ入ってきました。

撮影も全部若者で、高校生などがやっています。

(動画が止まる)。

ここで、このぐらいにしておけということなのですかね。

これはユーチューブで、フラッシュモブ in 静岡と検索していただくとお出るので、これは再生数に貢献していただくということで、続きをやっています。

今、何でこの動画を見ていただいたかと言いますと、私の原体験は、フラッシュモブに行ったことだからです。活動をすごくやりたいと思ったのですけれども、それはなぜかという、今までのアンケートなどもそうなのですが、日本は、自分がやりたいことは余りできないとか、社会で自分がやりたいことをやるというよりも、頑張っって社会に入っていくとか、周りに乗り遅れないようにしなければいけないという感情がすごく強かったと思います。

私は商業高校出身だったので、半分以上は就職していたのですけれども、そういう子たちも、社会にどう適応するかということばかりで、自分のやりたいことがもっと社会でできたらいいのとか、自分のやりたいことができる社会はすごくいいのだろうと思ってたときに、フラッシュモブを見たので、これが自分の思いを社会で実現するとか、自分のつくりたい社会をつくっていくということなのだと思って、これを俺はやっていきたくて、今もこういう活動を続けているわけです。

先ほどの棒人間がここにいるのですが、今日は2つ活動を紹介させていただきたくて、それぞれ事業体と運動体に分けながら、活動しています。

先ほど紹介したのは、若者エンパワメント委員会、YECの方です。YECは全ての若者が思いを形にすることを通じて、社会のつくり手となるためにという理念のもとで、若者の支援活動、ユースワークと呼んでいるのですけれども、先ほどの札幌の方などもそういう活動だと思うのですが、それを行っているのがYECです。

もう一つ、先ほどの放課後探しプロジェクト、略して放プロと言うのですけれども、その一環として、中高生がやったフラッシュモブがあったわけです。

それから、わかものまち・静岡実行委員会、卵のマークのチラシを先ほど配らせていただいたのですけれども、これはドイツやスウェーデンの若者政策を参考に、全ての若者に優しい町をつくることを目的として、若者活動の中間支援だとか、ロビー活動をしています。

わかものまちと言うと、若者だけがいる町とか、若者が自分勝手にやる町みたいに思われがちなのですが、そうではなくて、若者に優しい町です。若者に優しい町というのは、全ての人に優しい町だという理念のもと、活動をしています。

先ほど出ていた若者支援なのですけれども、ユースワークです。プロの方、大先輩もいるので、恐縮なのですけれども、ユースワークというのは、どんなものかということ、ざっくりと紹介させていただきます。ユースワークというのは、子供から大人へと移行していくプロセスを社会全体で支援していくことだと、私たちは捉えています。

例えば社会と関わる機会とか、社会で意思決定する機会を作ることです。自分がただ社会の中で生きていくだけではなくて、実際に社会と関わり、具体的なことでいうと、学校の運営に関わり、部活動にお金を振るときに、先生がばっと決めてしまうのではなくて、生徒たちの意見を聞いて、この部活に幾らという、そういう機会をつくるというイメージです。

それから、先ほども出てきましたけれども、若者をエンパワメントする。若者は力がないのではなくて、力が発揮できる機会とか、環境が整っていないから、力が出せない。だから、そういう機会とか、環境を整えようというのが、エンパワメントです。

ここで気をつけたいのは、若者というのは、単なる支援の対象ではなくて、ともに社会を再創造していく主体であるということ、一方的に支援をするのではなくて、一緒に苦労をするとか、一緒に試行錯誤していくということが、ユースワークの重要な部分になっています。

ピラミッドなのですが、先ほどもおっしゃっていましたが、子供・若者支援のピラミッドというもので、ターゲット型ではなく、ユニバーサル型であることと書いてあるのですが、日本だとターゲット型の支援が多いのです。例えばひきこもりに対する支援は、ひきこもりが対象です。ニートだったら、ニートの方が対象です。でも、そうではなくて、全ての若者を対象にして、さらに支援が必要な人に対しては、手厚くするということが、ユニバーサルな支援ということで考えられていて、全ての人にとって居場所になる。

居場所というところから、若者と関わる先輩の人とか、大人の人と、自分たちで企画をやってみようというときに、アドバイスをもらって企画をやったり、最終的に企画の作り手になっていこう、参画というふうに、ユースワークというのは、段階を経ていると説明をされることがあります。

なぜ若者が社会に参画する必要があるのかということなのですけれども、1つは、権利があるからです。それは何かというと、例えば子供の権利もあるのですけれども、現状で社会を見てみると、若者が社会の一員となれているかということ、必ずしもそうではないと私たちは思っていて、エンパワメント、環境や機会が整っていない、だから、それをつくるということです。

これが私たちの団体で一番意識していることなのですけれども、持続可能な社会をつくるためということです。これはどういうことかといいますと、特に北欧、スウェーデンなどはこういう考え方なのですけれども、次の社会を担う若者を社会全体で育むということです。つまり意思決定していく年齢をどんどん下げていく。大人たちが全部権限などを持っていて、その大人たちがいなくなったら、次の社会というのは、成り立たなくなってし

まう。だから、どんどん下に意思決定を下げていって、若者の方が長く生きるわけですから、今後60年とか生きる人をどんどん育てていく。だから、私たち大学生も、高校生とか、中学生にどんどん年齢層を下げてアプローチしています。

人口流出や地方創生への可能性というのは、今も地方創生が叫ばれていて、静岡県は全国で2位の人口流出なのです。北海道に次ぐ2位なのですけれども、若者が住みたい町を若者たちが自らつくっていくことによって、町への愛着とか、市民性が生まれて、やがて町の主体、次の町をつくっていく主体になっていくと、私たちは考えています。

説明が続いてしまったのですけれども、社会を変える戦略ということ、私たちが具体的にどういうことを考えて活動しているのかということを紹介して、最後にしたいと思います。

資源はこういうふうにあると考えていて、ユースワーク、YECは、2009年に発足したので、今年で7年目になります。中高生と関わっていく活動をしているので、そのノウハウがあります。

YEC以外にも、30団体ぐらい、若者の活動をしている団体があって、例えばカンボジアの売春問題について取り組んでいるところもあります。日本からお金を集めて、現地の団体にお金を渡すことで、こういうプロジェクト、例えば算数などをできるようにするとか、あとは、知識をつけていく。子供が売春などに引かれる手口というのは、こういうものだということを教えていく活動とか、そういう団体があります。

あとは、放置竹林問題です。竹が地域に生え続けていると、昔は竹を使ったのですけれども、今は使わなくて、放置されています。竹が生えていると、生き物が住めなかったり、新しく植物が生えないということで、竹を切りながら、地域の人と交流して、地域活性をしようという団体とか、30余りの学生団体があります。

これはわかものまちな方なのですけれども、外部評議員という方々についてもらって、若者だけではどうしても説得力がなかったりするのです。そういうところは、内部の大学の先生とか、大人たちに助けてもらおうという資源を使って、私たちはこういう短期目標、中期目標、長期目標という形で挙げて活動しています。

短期目標なのですけれども、静岡市、焼津市を拠点に活動しているので、そこで、若者たちがまちづくりに対して活動していくという、ユースカウンスル、若者会議というものを発足していて、それが1つです。

それから、ユースセンターです。先ほど若者支援センターという話が出たのですけれども、そういう施設が、今、静岡にはないので、それをつくろうということを、短期目標にしています。

中期目標は見ただけであればいいのですけれども、例えば意思決定とか、青少年の問題協議会などがありますが、そういうところにどんどん若者が参画しなければならないという条例などをつくってもらおうというのが、中期目標です。そのためには、客観的指標だとか、若者の活動が必要だということです。

最終的に静岡県の全ての市町村に、若者参画の条例が、若者が参画することによってつくられていくことを目標に活動しています。

先ほどここに出ていました、ユースカウンスル、若者会議なのですけれども、これもドイツとか、スウェーデンの事例をもとに考えていて、町単位の生徒会、部活動みたいなイメージで、今、それを創ろうとしています。例えば環境委員会、文化委員会、国際交流委員会、社会的な楽しみと安全みたいな委員会を創って、それぞれの若者、静岡の中学生、高校生、大学生を集めて、例えば環境問題だったら、フェアトレードのコーヒー豆を全てのコーヒー屋さんで使ってもらおうと活動したり、国際交流だったら、世界のいろんな問題をみんなにもっと知ってもらうような講演会を開こうとか、そういうことで、今、若者たち、中学生、高校生、大学生が動き出しています。

ユースカウンスルは、若者の興味・関心から始まることが重要だと考えていて、若者は若者なりの考えや意見を持っている。

民主主義というのが、私らの活動の根本にはありまして、民主主義を体感できる仕組みを設計する必要があると考えています。

長くなってしまったので、飛ばしていきます。

私たちの活動で、今、途中の変化なのですけれども、例えば高校生がクリスマス会をやりました。静岡の町中の場所を借りて、まちづくりとか、自分たちの町を考えるきっかけとして、みんなでクリスマス会をやって、町について考えようという企画に70人の若者が参加したり、あとは、マニフェスト大賞を私たちの団体で受賞させていただいたり、町に対して、それこそ静岡市役所の職員の方が、今日、いらっしゃっているのですけれども、静岡市長に若者2,000人の署名を集めて提言をしまして、先ほど言った、若者会議とか、ユースセンターをつくって欲しいと提言をしました。これは提言をしたのですけれども、市長から、まずは自分たちでやってみなさいというお言葉をいただきましたので、自分たちでもやっっていこうということで、今、活動しています。

この結果として、実際に静岡市の総合戦略に、わかものまち推進事業というものを載せていただいて、27年度に提言されたものを、今後、検討しつつ、やっていくということをおっしゃっていただいて、私たちも、今後、若者だけでも、社会を変えることができる、社会を変えるということを、今後どんどんいろんな人を巻き込んでやっていきたいと思って、活動しています。

今後なのですけれども、今、言ったとおり、認知度を上げていくとか、どちらかというと、今、こういう活動は、意識の高い人ではないけれども、どうしてもアンテナが立っている人だけしか、巻き込めないのではないかという懸念もあるのですが、そうではなくて、全ての若者が参画することによって、初めてわかものまちが成立すると思っているので、民主主義の原則、例えば声が小さい人だったら、その声を無視するのではなくて、声の小さい人の方に向かっていって、その声を聞いていくことで、静岡の全ての若者に優しい町というものが実現できるのではないかと考えています。

最後にアクションを皆さんに求めるということなのですからけれども、資金とか、人材など、経営資源を獲得していかないと、団体は存続しなかったり、活動ができないので、6月とか、7月にNPO法人化するので、その暁には、皆さんにも仲間になっていただいたり、賛助などをいただけたらと思っております。

そういうことで、ちょっと長くなってしまったのですけれども、私たちはこういう活動をしているということで、今後も応援をよろしくお願いします。ありがとうございます。

(拍手)

○鎌田氏 社長、ありがとうございます。社長でいいですか。

○水島氏 はい。

○鎌田氏 時間が延びておりますけれども、15分いただいて大丈夫ですか。

○司会 大丈夫です。

○鎌田氏 それでは、ここから15分いただいて、3人でパネルディスカッションをさせていただいて、その後、会場の皆様からの質問をお受けするという流れでいきたいと思えます。

まずお二人とも、お話ありがとうございました。

実践の参考になると思って、メモをとっていたのですけれども、実際に私もやっていて、すごく難しいと思うのは、コアチームの人たちは、すごくやる気があって、結構熱い思いを持っている人が集まったりすると思うのですが、外側に参加してくれる人たちとか、皆さん以外のコアメンバーの人たちのリーダーシップを育む、主体性を育むというのは、結構難しいと、私自身は感じているのですけれども、感じていますか。

○川崎氏 はい。

○水島氏 はい。

○鎌田氏 よかったです。皆さん自身以外、他のメンバーたちのリーダーシップを育むというのは、どんなふうにされているのか。難しさも言っていただいているので、でも、こうやったらうまくいったとか、ここが難しいという形でお話いただければと思います。

まず川崎さんからお願いします。

○川崎氏 私が大事にしていることは、やりたいと思っている、火がついた人は、すぐに消えます。でも、何かしたいと思っている小さな火は、重なるとすごく熱いエネルギーになるのです。また、炭になってしまっている人たち、ちょっとここが難しいのですけれども、火がついたところに炭を入れると、すごいエネルギーになるのです。それを人にかえて見てみると、この子は、今、炭だとか、次はこの子に新しい火を与えようとか、そういうことを考えて、私は活動をしています。

そして、先ほど時間もなかったのですが、すごく駆け足になってしまったのですけれども、よく地域の方から言われるのは、理解して支えてくれる人間は、結局のところ、ともに闘った戦友から出てくる。だから、一緒に闘わないと分からない。本当に支えてくれる人は、戦友からだ。だから、戦友を作るということをやっています。そこに力を入れると、結局

のところ、戻ってきてくれる。1回出たとしても、休んで戻ってきてくれる。それでいいのです。出ても、戻ってきてくれればいいのです。ここで培ったものが、外で生かされていても、いいと思うのです。私は、木とか、たき火とか、火ということを考えて活動しています。

○鎌田氏 ババコンを一緒にやるとか、そういう活動を一緒にやるのは、戦友と言うのですか。

○川崎氏 そうです。ともに闘う人たちです。それはイベントでも何でもいいのですけれども、地域で活動している、目的が違う自然保護の団体だったり、放課後に子供たちが遊ぶ場所だったり、何でもいいのです。

○鎌田氏 一緒に何か活動するということですね。

○川崎氏 一緒に闘ったことがある人です。

○鎌田氏 ありがとうございます。

それでは、社長、お願いします。

○水島氏 この中で、私が若いと思っているので、私が何かを言うのは、おこがましいのですけれども、うちの団体の場合、学生団体という特徴もあって、1年ごとに代わりをしていくのです。なので、私も1年やって、前代表という形になっているのですけれども、私の場合は、ほかの人のリーダーシップを育む上で、私がやらないということを徹底していて、今日は、私が来てしまったのですけれども、常にほかの子に対して、今回は君がやってみてくれとか、それこそ権限委譲、エンパワメントをしています。

自分の役割は何になるのか。ただぼうっと見ているだけなのかといたら、そうではなくて、自分はその人が安心して行動できるように、ちょこんと座って見守るみたいな、私はそういうリーダーがいいと思っています。何かあったら、飲みに行くかみたいな感じで、話は聞くのですけれども、基本的にはその子に全部任せることによって、次の代とか、自分でやっていかなければまずいと思ってもらうことで、周りも、成長というか、リーダーシップを身につけていってくれるのではないかと考えて、活動しています。

○鎌田氏 ありがとうございます。任せるのは、すごく怖くないですか。

○水島氏 そうですね。

○鎌田氏 失敗したらどうしようかと思いませんか。

○水島氏 思います。

○鎌田氏 どうしているのですか。失敗したらどうしよう、大ごけしたらどうしようと思いますね。

○水島氏 そこで上から言ってしまうとだめだと思って、まずは気づいてもらうことです。

例えば講演会の企画があるけれども、3日前にまだ目標の人数の半分しか集まっていなかったときに、本人に気づいてもらえるように、調子はどうなのかと、ちょっと遠いところから聞いてあげて、あと3日で、もう半分を集めるにはどうしたらいいと思うみたいに、考えてもらうことで、そこでも一緒に知恵を出し合って考えたり、あとは一緒に考

える人をつなげるということは、元リーダーなどだったらできると思うので、あの子に電話をしてみなさいとか、やっていくことが、いいと思います。

○鎌田氏 ありがとうございます。

先ほど茜さんも失敗していい、失敗しても大丈夫だという環境をつくるのが、すごく大事だと言っていて、そこが共通していると思いました。

コミュニティ・オーガナイズングでも、自転車に最初から乗れる人はいますかという質問を必ずするのです。乗れないです。補助輪を外したときは、必ずこけると思うので、誰でも最初はこけるし、こけてもまた乗って、バランスをとりながら、乗れるようになっていくことが大事だという話をしているのですけれども、先ほどのお話、言うのではなくて、引き出していく、本人に気づいてもらうというところも、コミュニティ・オーガナイズングの考え方に近いと思って、コーチングというものを教えているのです。

お二人は1日だけだったので、受けていないところがあるのですけれども、コミュニティ・オーガナイズングということを、今回、せっかくフィーチャーしていただいているので、これについての質問もしたいと思うのですが、先ほど茜さんが研修を受けて、自分自身の心を確認できたとか、そういうお話があったので、去年の研修がパブリック・ナラティブという、ストーリーを語るころだったのです。先ほどのジェームズ・クロフトさんのストーリーだったり、冒頭に茜さんが話したストーリーだったり、私が冒頭に話したストーリー、自分自身のことを語るというところだったのですが、自分自身と私たち、そして、今、行動していこうということを語っていくストーリーの語り方になります。実際にそれを学ばれて、現場に持って帰ったり、御自身の日々の生活などで、自分自身の変化だったり、周りの変化はありましたかということをお伺いしたいと思います。

○川崎氏 私は今年度で代表が3年目だったのですけれども、去年までは、誰もついていけないと言われていたのです。先に走り過ぎて、後ろを見てと、仲間と言われてたのです。そのときに、私は走りたいタイプなので、それについてきて欲しかったのです。だけれども、そうではない、みんなで作らなければいけないといったときに、月1イベントを考えたのです。

月1イベントは、12回あるので、その一つ一つに責任者をつけて、全て投げました。やってください。それで、失敗するのです。5～6人しか来ないことがあるのですけれども、それでいいのです。やはりこうだったね、しめしめ、そう考えてくれるよねと思いながら、そのきっかけづくり、委ねるということは、続けていきたいので、若者たちに委ねて、今年1年間やってみたら、更なる仲間が増えたということがありました。

あと、フォローするのは、私ではできないのです。やはり地域の人たちが必ず支えてくれているので、いろんなところに出ています。土建関係の人もちろんなのですが、自治会だったり、JCの方とも交流をしたり、商店街にレンタルのステージなどをお願いしているのですけれども、商店街の人たちと交流会をしたり、そんなことはつなげています。大人と若者です。そういう若者が1人だけでもいると、失敗したときに、大丈夫、言って

おいたから平気となるのです。そういうことは、私にできること、私が伝えられることだと感じています。

○鎌田氏 ありがとうございます。失敗してもいい環境を作っていくというのが、すごく大事だと、改めて思いましたし、先ほど講演の中で、再確認できたというか、辞めようと思っていたのですね。

○川崎氏 はい。

○鎌田氏 それを再確認できたというのは、やはりワークショップ中にそう思われたのですか。それとも、帰ってから思われたのですか。

○川崎氏 今まで市役所と協働事業で一緒にやっていたのですけれども、今回、忙しいからできませんと、私たちは全部の部署に切られたのです。2011年に立ち上げようと話をもってきたのに、何で切るのか。私は大学生のときに代表をやっているのですけれども、2年間やった人は、拝島に引っ越してしまって、立ち上げたけれども、空っぽ状態だったのです。それも私が走り屋なので、ついていけない、そんなに町のことはできないと、離れていったというのが現状だったのです。

私ともう一人で、この3年間持ち直したのです。持ち直したのに、茜、行き過ぎだと言われてしまう。そのときに、一つ一つ考えて、自分に問いかけます。研修会ときは、頭が痛かったです。私は何でこの活動をやっているのかということを、ひたすら考えて、言葉にして、やはり自分の人生を知っている人と、自分と一緒に生きられる人がいる、この関係を作りたいということで、ここで辞めない、次につながる人材をまずは今年1年間で育成しようと決めました。

○鎌田氏 すごいです。そんなピンチなときに、会っているのですね。

○川崎氏 そうですね。

○鎌田氏 説明し切れていないところがあると思うので、あれなのですけれども、ストーリー・オブ・セルフ、自分自身、なぜこの活動をやっているのかということ、原体験のところ。先ほど社長も原体験と言ってくれましたけれども、何でこれをやっているのかということが、自分で認識できると、いろんな困難があっても乗り越えられる、やはりこれやっといこうと思えるのです。すごく強い原動力になっていくので、そこがまず大事なのです。

次にストーリー・オブ・アスということで、私たちの物語です。私たちはもともと青梅が大好き、この町はいいよねという、ストーリー・オブ・アスを見出していくことで、一体感を生み出していくというのが、パブリック・ナラティブで大事にしているところになります。

○川崎氏 ありがとうございます。

○鎌田氏 社長、どうですか。研修会などの変化とか、周りの変化とか、ありますか。

○水島氏 実は私も研修会のために、どん底で、忘れもしないのですけれども、私が代表になったのが、研修会の1カ月前、12月ぐらいだったのです。一昨年12月です。そのと



きは、どちらかという、川崎さんが前にと感じだとしたら、元代表だった子がそのタイプで、後ろに目をつけろ、後ろを振り向けと、ずっと言われていた子なのですけれども、その子がやっていくうちに、メンバーを取りこぼしてしまっていて、例えば学生の団体なので、1年生が新しく入ってきてくれたりするのですけれども、1年生たちが、例えばどういことをしたくて入ったのかとか、どういう思いを持って活動しているかみたいなことについて、ちゃんと向き合うことができていない状態で、当然辞めてしまう子が出てきたりしていました。

一番ショックだったことが、同級生の子で、私が入ったころから、ずっと一緒にやっていた子も辞めると言い出して、そのときは、ちゃんと納得する理由を私には伝えてくれなくて、ほかのメンバーにも伝えてくれませんでした。辞めてしまったのが夏だったのですが、辞めた後、10月とか、11月ぐらいに、辞めてしまった理由を改めて聞いたときに、その子が言ったのは、自分に対して、これをやってと言われたことは、一緒にやれたけれども、自分からこれをしたいからやるということは、できなかったと言われて、それがすごくショックでした。その子がやりたいと思っていたこととか、その子の思いというのは、全く見てあげられていなかったと思って、そういう状態の団体は、絶対にだめだと思って、そのころ代表をやっていた人と交代する形で、私が代表をやることになりました。

その状態を何とかしたいと思っていたのですけれども、それが12月で、何ともできていない状態が1月まで続いていて、どうしたらいいのだろうかというときに、COJの研修などがある、それから二度とそういう状態、メンバーを置いていってしまっている状態にしてはいけないと思って、前にいっている子は、影響力もあるし、すごい子だったので、私ができることは何かといたら、それをサポートするとか、つまりいてしまった子とか、どうしたらいいのだろうかとかとまってしまっている子がいたら、声をかけてあげるとか、一緒にやっいてこうとモチベートするというか、本人の話を聞いたりする。

先ほどの研修のことを言うと、進んでいこうという道と一緒に考えて明らかにして、何とか今も団体が存続しているのは、その要因があったのではないかと考えていて、それが生きたことです。

○鎌田氏 そんなに持ち上げなくても大丈夫です。ありがとうございます。

一人一人の思いが形になっていくことがとても大事で、2人とも共通しています。先にいってしまうリーダーがいて、みんながついていけないところがある。思いは大事なのだけれども、アスというか、私たちが一緒にやっいてこうという気持ちをつくっていくことは、すごく大事です。

ありがとうございます。

もしよかったら、ここで会場の方から質問をいただいて、最後にお一言ずついただくという感じがいいと思うのですが、いいですか。

## 質疑応答

○司会 それでは、お時間の関係もありますので、ここで、会場の皆さんから、御質問とか、御意見とか、会場全体で登壇者との共有ができればと思いますけれども、いかがでしょうか。

○質問者1 青少年健全育成に関わっている者です。

パネラーのお二方に質問ですが、おうめ若者カフェ、YECさん、それぞれ何人ぐらいで、どういう人たちがメンバーが構成されているのですか。。

○川崎氏 そういうところをちゃんとお伝えしなければいけないのですけれども、すみません。

おうめ若者カフェは、今、実行委員が7名います。

メールの会員と呼ばれているものが、50名程度です。

それと、フェイスブックでの情報発信を主に行っているもので、そこが、今、550人ぐらいいます。

○水島氏 YECは、今、メンバーが14名いて、高校生が1人、大学生が13人という形になっています。

SNSは、フェイスブック、ツイッターで、それぞれ、いいねとか、フォロワーさんがいます。確認しないとわからないのですけれども、ツイッターの方は、若者を中心に1,000人以上フォロワーはいる感じです。

○質問者1 ありがとうございます。

○司会 ほかはいかがでしょうか。真ん中の方、お願いします。

○質問者2 今日、素晴らしい発表をありがとうございました。

ちょっと変な質問なのですが、川崎さんがババコンをやられて、素敵なイベントだと思うのですけれども、あの服とか、費用もかかると思うのですが、その費用はどうしているのかということが1つです。

もう一つは、年配の方々がそういう服装をされて、それはイベントのとき用だけなのか、もしくはその後も、例えばそれをきっかけに交流などが続いているのか。イベントだけなのか、その後に、今まで年配の方がやられていなかったところとつながっていったのかとか、その辺はどうなのか、教えてください。

○川崎氏 ありがとうございます。

費用はクラウドファンディングで、35万円という目標金額を達成できたので、実現しているのですけれども、今までは助成金をもらっていました。宝くじの助成金で、2年間、100万ずつもらっていたのです。あと、商店街から委託事業というところで、私たちが50万円程度で運営してほしいということをしていました。

でも、今年度は、全く何もなかったらどうなるのかということに挑戦してみたくて、私たちが資金が集められるのかということをやりました。そこで、ないのだったら、あげる

という人がいるのです。やはり関心のある方はお金を出してくださるのです。言ってくれる人が出てきたことも、今年得たものだったと思っています。

また、服装なのですけれども、1人のモデルさんに対して、1万円と決めています。若者に対しても謝金を払っています。時間を使うということに対して、若者は無償ではなかなかしないです。払っても、そこから得るものは大きいと思っているので、私たちはそのお金は無駄ではないと思っています。

服装に関してなのですけれども、動画のものは、結構奇抜な衣装もあって、それはお孫さんにプレゼントするとか、あとは、スタイリストの人に渡すということをしています。今回のファッションショーに関しては、普段着になってしまったので、ファッションショーらしくはなかったという反省点があるのですけれども、普段も着て、若者と出かけたりするのです。あとは、家に行って、おでんを食べたと、昨日、聞きました。あと、ごみ拾いをするおじいちゃんと、河原で一緒にごみを拾ったという話を聞いています。その後の交流は必ず残っています。

一緒に服を買いに行くときに考えるのです。青梅市はすごく田舎なので、買う場所がすごく限られているのです。例えばですけれども、大手で買ったときに、それは町に落ちない、どうするのかということも、若者と高齢者で考えるのです。そこで雇用をされている人は、青梅の人ですとか、ネットで買ったほうが安く済むけれども、それを配達してくれる人は青梅の人だとか、一つ一つが深いのです。

1万円の中で、買えないものもあります。靴だったり、帽子とか、小物です。小物は若者から貸し出したり、そういうことで、貸してくれてありがとうと、フルーツ屋さんだと、フルーツバスケットが来るとか、1つのこと、たかがファッションショーなのですけれども、そこから考えることは、高齢者と若者で哲学をしています。

お答えになっていますか。

○質問者2 そういうことでしたか。ありがとうございます。

○司会 それでは、最後にお一方ぐらい、御質問や御意見などがありましたらと思えますけれども、いかがでしょうか。後ろの方、お願いします。

○質問者3 お話、ありがとうございます。

市役所職員という立場でお伺いさせていただきたいのが、先ほど川崎さんのところは、市役所から切られてしまったというお話もある中で、水島君の活動もよく存じていまして、皆さん御自身は、自分たちでしっかり人も集めて、成功されている中で、例えば市とか、行政に対して、こういった部分があるといいとか、もしそういったものがあれば、教えていただきたいと思います。水島君のお話はよく聞いているのですけれども、共有のために改めて聞かせてください。お願いします。

○川崎氏 市役所に求めることは、今のところ、青梅はないです。切ってもらったから、私たちはこれだけ今年度力を入れたのです。広報活動も、切ってもらわなかったら、全部お任せで、市役所が集めると、真面目な子が集まるのです。すごく得していて、簡単なの

です。でも、切ってしまったら、広報も出せない、どういうふうにしたらいいのだろうかということで、各イベントでチラシを配らせてもらったり、講演会で若者を見つけたら、とにかく若者に言ったのです。だから、今回は市役所に切ってもらってよかったと思っています。

将来的になのですけれども、青年層の社会教育として、プログラムを入れてほしいです。でも、それを運営するのは、おうめ若者カフェにしてほしいのです。市役所がやってもおもしろくないのです。育成とって、今、青少年のことをやっても、おもしろくないのです。だから、それをやってほしいとは、今、思っていないくて、委託できるぐらいの信頼度がつくれたら、私たちにその部分を任せてほしいと思っています。本当の社会教育、青梅に住むと決める人はいると思っています。

そんなところです。

○水島氏 この後に、何を言えばいいのかあれなのですけれども、確かに私らも公のお金ありきでやっていると、どうしても継続性とか、私らが目指しているビジョンとも一致しなくなってしまうことがあるので、そういう面では、もしかしたら、逆にお金がなくてもいいと思ったりします。

私が思うのは、今回焦りながらスライドをやっていたのですけれども、私たちのビジョンとして、若者の政策を制定させるということがあります。若者政策というのは、具体的に言うと、スウェーデンとか、ドイツなどであるように、意思決定を町でするときには、必ず若者を参画させるということです。あとは、それこそ今回も、実際に静岡市には、わかものまのちの推進事業という形で、総合戦略にも載せていただいたのですけれども、学校も、静岡市内とか、県内にはたくさんあって、若者に対してアプローチをするとすると、どうしても手伝ってほしいという部分があるので、むしろ、今後、学校などに対するアプローチだったら、市役所とか、教育委員会などともつながって行って、協力して、広報とか、まちづくりをやっていきたいと思っているので、そういう意味では、言い方はあれですが、こういうふうにしてほしいと言ったときに、それに応えてくれるようなあり方があると、私たちも頑張れると思います。

○質問者3 ありがとうございます。頑張ります。

○司会 それでは、質問は、以上とさせていただきますと思います。

3名の皆様、本当にありがとうございました。

## 登壇者からの御挨拶

○司会 最後に、せっかくですので、登壇者の皆様から、会場の皆様に一言ずつメッセージがあればと思いますけれども、水島さん、川崎さん、鎌田さんの順番でいかがでしょうか。

○水島氏 今日は、ありがとうございました。

25年度に先輩たちが内閣府の社会貢献青少年表彰をいただいて、そこからいろいろつながりがあって、研修を受けさせていただいたり、今日もこの場に来させていただいているのですけれども、こうした若者から始まった動きで、社会を変えていくという事例は、日本では余り多くないと考えていて、だからこそ、こういう動きに対して、最近の若者はと、先ほども言っていましたけれども、最近の若者感が変わっていくことが、私たちの活動への一番の助けになると思っています。

今日、集まってくださっている方々は、若者と接している方がすごく多いと思うので、そういうことは余りないのかもしれないのですけれども、若者が活躍できる土壌というのは、社会が変わっていかないと、なかなかそういうふうにはなっていないと思うので、それこそ日本が若者に優しい国としてやっていけるということが、私たちの最終目標だと思うので、皆さんもこういう若者がいたら、だめなこともあるかもしれないのですけれども、サポートをお願いしたいと思っています。

拙い話でしたが、今日はありがとうございました。（拍手）

○川崎氏 ありがとうございました。

先ほども伝えたのですけれども、次世代を見つけたり、育てたい、Iターン、Uターンのイベントをしたいというときに、呼んでもらえたらうれしいと思っています。

ここでつながった若者が、いつかアクションを起こせるような、つながって、こんなことをしているとか、私はいろいろ考えているのですけれども、各地域のお祭りを一斉に同じ日にやるとか、3.11のときに、みんなで平和を祈るために、声を上げるのか、物をつくるのか、風船を飛ばすとか、日本がつながれるような文化活動をしたいと思っています。それは言っていれば、叶うと思っているので、そのときに、皆さんとつながりたいと思いました。ババコンを広めていくと思うぐらいのエネルギーを、逆にもらう日にもなったと思っています。

今日は、ありがとうございました。（拍手）

○鎌田氏 皆様、長い時間、ありがとうございました。

私たちCOJは、基本的にボランティアな団体でして、70人ぐらいのコーチがいるのです。全国に散らばって、首都圏には30~40人ぐらいコーチがいるのですけれども、よく話を聞いてみると、大学生のときに、例えば署名を集めてクーラーを入れることができたとか、大学生のときに、ちょうど2000年だったので、2000年イベントをみんなでやったことがあるとか、学生のときに、自分たちの力で、何かができたと思える人たちがすごく多いので

す。若いときに成功体験というか、小さなことでもいいので、自分たちの力でできたと思えたと、こんなにも人の人生というのは、変わるのだと感じています。なので、皆さんがやっていらっしゃることは、すごく大事なことだと思います。

先ほどの社長の事例も、支援者ではなくて、主体者になってもらう。支援をしてあげるのではなくて、主体者になっている。若者にはすごく力があると思いますので、それを引き出す役割が皆さんにあるのではないかと思いますし、コミュニティ・オーガナイズという考え方は、人の主体性を引き出して、能力を引き出して、社会に変化を起こしていくという考え方なので、何かお役に立てることがありましたら、講演でも、ワークショップでも、いろんな形で関わればと思いますので、実際に皆さんと一緒に変えられるという輪を広げていければと、改めて思いました。

今日は、どうもありがとうございました。

○司会 それでは、会場の皆様、最後に登壇者の方に拍手をお願いいたします。（拍手）  
ありがとうございました。